

原著

## 公議人の変遷について

三村 昌司

List of Koginin

Shoji Mimura

### 要約

近年公議所の研究は進展してきたが、誰がその役をつとめてきたかという基本的なデータについてはまとめられてこなかった。そこで本論文は、公議所とその後身である集議院の構成員（公議人・議員）について、明治2年3月、5月、10月の3つの段階でそれぞれ明らかにした。また、公議人は近世の江戸留守居役の系譜をひき、酒楼などで多くの会合を重ねる「茶屋政治」も引き継がれていることが指摘されてきた。しかし、留守居役組合と公議所分課の構成員をみると単純な連続性ではなく、近世以来のネットワークと公議所でのグルーピングが重層構造である可能性を指摘した。

### キーワード

公議所, 集議院, 公議人, 明治維新

## 1. はじめに

本論文は、公議所とその後身である集議院の構成員について明らかにすることをめざす。公議所は明治2年(1869)3月に開院した議事機関である。構成員は各藩から1名ずつ派遣することとされ、公選制ではなかった。しかし各藩の代表が一堂に会し、法律制定権が制度化されるなど、日本における近代的議会の嚆矢ともいえる。

公議所の評価については、幕末維新时期における流動的な政治情勢のなかで、公議所が明治新政府にとって重要な政治的意味をもっていたことを宮地正人が1980年代に指摘した<sup>1)</sup>。その後、山崎有恒が公議所の制度について定めた「公議所法則案」の制定過程や、公議所をめぐる政治諸勢力の動向を明らかにするなど研究を重ね<sup>2)</sup>、三村昌司は三田藩公議人を事例に公議所の議論のありようについて探っている<sup>3)</sup>。

これらの研究によって公議所の様相はかなり明らかになってきている。しかし、実のところ公議所（とその後身である集議院）の構成員（公議人・議員）が誰だったのかという基本的データは明らかにされていない。そこで本論文では、公議所と集議院の構成員のリストを作成し掲載する。

さらに、公議人は、これまで江戸留守居役との関連を指摘されてきた。すなわち、江戸留守居役が情報交換のために繰り返していたいわゆる「茶屋政治」を、公議人も引き継いでいたとする<sup>4)</sup>。実際公議人はたびたび会合を開いていたのだが、それが江戸留守居役として行っていた会合同様の人脈を生かしていたのかどうか検証されたことはない。そこで、本論文ではその点についても言及する。

## 2. 用いた史料

公議人・集議院の構成員リストを作成するにあたっては、以下の史料を参照した。慶応3年の殿席は、同年の『袖玉武鑑』によった。これは国立国会図書館デジタル化資料(<http://dl.ndl.go.jp/>)によって閲覧することができる。明治2年3月の公議人は、国立公文書館アジア歴史資料センターHP(<http://www.jacar.go.jp/>)で閲覧できる『官員録』を利用した。

明治2年5月、10月の公議人・集議院議員については、栃木県文書館寄託の秋元武夫家文書に残されていた公議人・議員の名簿を利用した。秋元家は、近世において医業により喜連川藩に仕えていたが、幕末の与助の代に藩主喜連川熙氏から医業を廃し儒学をもって家臣の教育にあたることを命じられ、藩校翰林館学頭に就任している<sup>5)</sup>。与助は維新後、藩の参政、公議人に任じられており、公議人・集議院議員のリストはその時期に手に入れ今日に伝わったと考えられる。

末尾【表2】「公議人・集議院議員一覧」の明治2年5月欄の隣に記した「課」は、明治2年2月2日に制定された17の分課の略称である。この日、公議所議長から公議人に対し17分課のうちからひとつあるいはふたつの分課を選択することが達せられた<sup>6)</sup>。その後、公議人は分課に所属して専門の調査を行い、議案作成を行うことが通達された<sup>7)</sup>。17の分課は、勸農・租税・郵便・貨幣・外国交際・外交交易・鉱山・度量・国内商業・開墾・学校出板・刑法・軍律・海軍・教法・陸軍・営繕水利である。なお、分課制は明治2年7月に公議所が集議院に改組され、法案制定権が剥奪されたのと同時に廃止されたと考えられる。

明治2年10月の横に記した「部」は、公議人どうしの連絡強化を目的として、公議人を居住地区別に12に編成し、それぞれに十二支の名称を付したものである<sup>8)</sup>。

## 3. 公議所・集議院の構成員

公議人は慶応4年(1868)8月20日に新政府が設置した役職である。その職務は「議員ニシテ朝命ヲ奉承シ藩情ヲ達スルコトヲ旨トス」<sup>9)</sup>と定められた。定数は、各藩の意見を集約させるために2月に設置された貢士制度を引き継いで、藩の規模に応じ1~3人を選ぶこととした。その後、元号改まって明治元年(1868)12月10日、行政官布告<sup>10)</sup>によって翌年2月15日に公議所を開院すること、各藩1人ずつ選任することなどが定められた。また、10月28日に出された「藩治職制」によって、公議人になれるのは各藩の執政・参政に限られていた<sup>11)</sup>。

この公議人が制度的に発足したさい、どのような人物が各藩で選ばれたのかを一瞥できる史料は管見の限り見つからない。この点は今後の史料発掘の課題である。ただ公議人の選任は順調に進まなかったようで、9月12日には「公議人姓名見届藩々モ有之候間来十三日迄二届出可申事」<sup>12)</sup>と改めて通達されている。

公議人に選任された人名がわかる最も古い史料は明治2年3月の『官員録』である。公議所が開所したのが3月7日なので、開設前の人員リストであろう。それによれば287藩(一橋家・田安家含む)の

うち 84 藩で名前が挙がっておらず、公議人の選任が進んでいないことがうかがわれる。

秋元家文書に残された 5 月の名簿によると、選任されていない藩は 25 藩と大きく減る。公議所が実際に開設されたことで選任が各藩でも進んだものと思われる。ただし、戊辰戦争の影響で東北諸藩の選任が遅れている。新政府もその点は考慮していて、2 月 8 日に東北諸藩に対し「五月中ヲ限り東京公議所へ差出可申」ことをすでに通達していた<sup>13)</sup>。その後東北諸藩でも選任が進み、10 月の段階では不選任は 14 藩にまで減っている。ただしそのうち米沢新田藩・鹿奴藩・若桜藩・高知新田藩は支藩であって一貫して公議人を選任しておらず、さらに長州藩の支藩である徳山藩・清末藩は 5 月段階から選任していない。またこの時期三田藩は九鬼求馬が公議人を辞す前後<sup>14)</sup>でちょうど交代の時期であったため空白になっていると考えられる。そのような事情も加味すれば、10 月段階ではほとんどの藩で公議人の選任が行われていたといえる。明治新政府によるできるだけ広範な意見を聴取し政策決定の正当性を担保しようとする思惑と、自藩の意見を政策に反映させて言路洞開を実質化させようとする各藩の方向性の一致が、このような動向へとつながったといえる。ただし、新政府は公議所・集議院といった議事機関に、政治的意思決定を付託しているわけではない点は注意が必要である。

#### 4. 江戸留守居役との関係

江戸留守居役には近所組合や同席組合などさまざまなまとまりの留守居役組合が存在していた。このさまざまな留守居役組合のつながりと公議人のつながりを全面的に比較する用意は現時点ではないが、サンプル的に服藤弘司が調査した安政 6 年(1859)柳間留守居組合<sup>15)</sup>のうち、愛宕下向寄組合に所属していた 16 家を取り上げてみると【表 1】、分課は 8 つに分散しており、12 部制においても 4 つに分散している。また、人的にも留守居が公議人になる事例は

はっきりしない。紙幅の関係で掲載できないが、服藤が明らかにした安政 6 年段階の柳間詰大名留守居役 56 名のうち、公議人と同名のものも確認できない。とはいえ「茶屋政治」が公議人に引き継がれていたのは事実であるから、公議人のネットワークは、分課制や 12 部制といった新たな制度における関係性と、留守居役の系譜をひく近世以来の人的ネットワークの多重構造をなしていたと推測できる。

【表 1】愛宕下向寄近所組合と公議人分課・12 部対比表

No	藩名	国名	留守居氏名	課	部	公議人名(明治 2. 10)
1	備前新田	備前	三宅健次郎	陸	辰	三宅鋌太郎
2	新発田	越後	寺田数右衛門 鈴木鑊五郎	外	卯	佐藤八右衛門
3	小泉	和泉	藤林庄左衛門	陸	卯	藤林乙三郎
4	赤穂	播磨	斉木衛門七	学	午	神吉重三
5	佐伯	豊後	宮本又左衛門	営	未	古川韜
6	薦野	伊勢	高橋八郎	農	卯	太田省吾
7	日出	豊後	一宮松兵衛	学	午	帆足龍吉
8	丸亀	讃岐	浅岡新五郎 中村弥一兵衛	営	午	加藤修造
9	飢肥	日向	平部次郎左衛門	数	?	稲津濟
10	豊岡	但馬	磯貝喜馬太	交	戌	岩崎豊
11	臼杵	豊後	大崎十郎兵衛	営	午	橘朴
12	清末	長門	片見小次郎			(不在)
13	大溝	近江	三宅頼母	学	戌	蔵田寛之助
14	小城	肥前	小野宅右衛門	海	辰	園田筑五郎
15	津和野	石見	山崎伝兵衛	数	辰	小裁纈
16	人吉	肥後	渋谷得蔵	農	申	新宮竹間

服藤弘司『大名留守居の研究』(創文社、1984 年) 443-444 頁表 59 をもとに作成

## 5. おわりに

公議人は江戸留守居役の系譜をひくものとしてこれまで描かれてきたが、本論文ではその連続性について、従前までの関係と当代の関係の多重構造である可能性を指摘した。ただ、公議人・集議院議員が江戸時代以来の「茶屋政治」の伝統をどのように引き継いだか。この点は公議人・集議院議員個々の経歴調査によって、いっそう明確化してくるであろうことを最後に指摘して擱筆したい。

- 1) 宮地正人「廃藩置県の政治過程」(坂野潤治・宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』山川出版社、1985年、のち『幕末維新期の社会的政治史研究』岩波書店、1999年) 所収。
- 2) 山崎有恒「「公議」抽出機構の形成と崩壊」(伊藤隆編『近代日本の再構築』山川出版社、1993年)、「明治初年の洋学者と議会制度導入」(『日本歴史』554号、1994年)、「明治初年の公議所・集議院」(鳥海靖・三谷博・西川誠・矢野信章編『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館、2005年)、「公議所・集議院の設立と「公議」思想」(明治維新史学会編『講座明治維新』3巻、有志舎、2011年)。
- 3) 三村昌司「公議人の存在形態と公議所における「議論」」(『歴史学研究』842号、2008年)、「近代日本における政治的主体の形成」(『日本史研究』618号、2014年)。
- 4) 白石良夫『最後の江戸留守居役』(ちくま新書、1996年) 232頁参照、前掲山崎「「公議」抽出機構の形成と崩壊」参照。
- 5) 「収蔵文書紹介 38 秋元武夫家文書」(『文書館だより』39号、栃木県立文書館、2006年) 参照。
- 6) 栃木県立公文書館収蔵三田チヨ家文書 110「集議院日録」。三田家は黒羽藩の公議人をつとめた三田称平を出している。
- 7) 秋元家文書 448「明治二年公議御用留」。
- 8) 学海日録研究会編『学海日録』2巻(岩波書店、1991年) 337頁参照。『学海日録』は佐倉藩公議人もつとめた依田学海の日記である。
- 9) 『法令全書』明治元年。
- 10) 同上。
- 11) 「藩治職制」(『法令全書』明治元年)。なお執政・参政とは「藩治職制」により定められた家老職に相当する役職のことである。藩ごとに異なっていた職制の統一と世襲制に限定されない人材登用をめざした(山中永之佑「明治前期における地方制度の展開」、山中ほか編『近代日本地方自治立法資料集成』1巻、弘文堂、1991年、4頁参照)。
- 12) 『法令全書』明治元年。
- 13) 『法令全書』明治2年。
- 14) 前掲拙稿「公議人の存在形態と公議所における「議論」」参照。
- 15) 服藤弘司『大名留守居の研究』(創文社、1984年) 443-444頁参照。

【付記】本稿脱稿後、寺島宏貴「「公議機関」の閉鎖」(『日本歴史』786号、2013年)を得た。併せて参照されたい。

【表2】公議人・集議院議員一覧

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
山城	淀		荒井木公	長崎鋤七郎	營	広瀬桐江	子	小川町
大和	郡山	帝鑑間	藤波牧太	青木定人	学	茂木亭左衛門	卯	愛宕下
大和	高取	帝鑑間	富永主馬	富永主馬	駅	富永主馬	申	赤坂御門内
大和	小泉	柳間	藤林乙次郎	藤林乙次郎	陸	藤林乙三郎(ママ)	卯	愛宕下
大和	櫛羅	菊間	山本昇之助	山本昇之助	軍	山本昇之助	戌	青山権田原
大和	芝村	柳間	恒岡完次郎	恒岡完次郎	駅	恒岡完次郎	未	白金台町
大和	柳本	柳間	味岡弥一左衛門	味岡弥一左衛門	度	味岡弥一左衛門	午	芝新堀
大和	柳生	菊間		村田忠之丞	駅	村田忠之丞	卯	増上寺裏門前
大和	田原本			齋藤幸之進	交	齋藤俊郎	卯	増上寺裏門前
河内	丹南	菊間	井上五郎兵衛	西村継助	軍	西村継博(ママ)	未	下渋谷
河内	狭山	柳間		山上郷衛	陸	山上郷衛	卯	三斎小路
和泉	岸和田	帝鑑間		田代環	度	田代環	申	赤阪山王
和泉	伯太	菊間	野々村倫右衛門	野々村倫右衛門	軍	野々村隆	申	永田町
摂津	尼ヶ崎	帝鑑間	服部清三郎	服部清三郎	度	服部清三郎	未	赤羽根
摂津	高槻	雁間	館野忠左衛門	館野忠左衛門	營	館野忠左衛門	辰	数寄屋橋内
摂津	三田	柳間	九鬼求馬	九鬼求馬	刑			兼房町
摂津	麻田	柳間	福井大助	福井大助	租	福井大造(ママ)	未	三田古川端
伊賀	津	大広間	平井東馬	平井東馬	刑	平井東馬	子	神田橋内
伊勢	桑名	溜間						
伊勢	亀山	帝鑑間	近藤百助	近藤幸止	刑	近藤幸止	丑	下谷薮小路
伊勢	久居	柳間	岡本治兵衛	岡本治兵衛	刑	岡本貞	寅	向柳原
伊勢	長嶋	元雁間	伴勘九郎	伴勘九郎	租	伴勘九郎	辰	築地三ノ橋
伊勢	神戸	帝鑑間	福井謙藏	福井謙藏	学	福井謙藏	子	神田バシ外
伊勢	薦野	柳間	太田省吾	太田省吾	農	太田省吾	卯	愛宕下
志摩	鳥羽	帝鑑間	稲垣隼人	稲垣隼人	貨	稲垣隼人	戌	糺町八丁目
尾張	名古屋		大津武五郎	大津武五郎	駅	小笠原龍三	戌	市ヶ谷
尾張	犬山		吉田庄左衛門	吉田庄左衛門	農	吉田秀	戌	四ッ谷ゴモン内
三河	吉田	溜間格	遊佐斎	和田理兵衛	軍	関口参藏	子	呉服バシ内
三河	西尾	帝鑑間	今井因書	笠原雄二		菅敦	巳	深川万年町
三河	重原			栗山誠一郎	貨	栗山誠一郎	卯	木挽町周防バシ →築地ミノハシ
三河	岡崎	溜間格	大野十郎左衛門	坂口音度	農	坂口音度	亥	森川宿
三河	刈屋	雁間	馬場鋌之丞	馬場鋌之丞	營	馬場鋌之丞	申	赤坂御門内
三河	拳母	帝鑑間	川西六三	川西六三	教	川西六三	子	半蔵ゴモン外 →本所竹蔵
三河	田原	帝鑑間		平山志右衛門	内	村上定平	戌	半蔵ゴモン外
三河	半原	菊間	望月太兵衛	望月太兵衛	農	望月太兵衛	申	永田馬場
三河	西端	菊間	秋元慶之丞	秋元慶之丞	刑	秋元慶之丞	亥	神楽坂
三河	西大平	菊間	岩崎武兵衛	岩崎武兵衛	交	岩崎武兵衛	午	外桜田
遠江	堀江		内田理兵衛	内田理兵衛	農	内田理兵衛	亥	小川丁ホリドメ*
駿河	府中	雁間	杉浦兵庫	杉浦誠	外	妻木努		佐久間町
相模	小田原	元帝鑑間	堀江覚右衛門	堀江覚右衛門	租	堀江勇	卯	芝大門
相模	荻野山中	菊間	岡本太郎	岡本太郎	陸	岡本太郎	酉	市兵衛町
武蔵	忍	溜間		永田覚左衛門	学	永田覚左衛門	寅	三味線堀
武蔵	川越		小久江権右衛門	小久江権右衛門	学	小池晋	巳	浜町

公議人の変遷について  
三村 昌司

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
武蔵	岩槻	雁間	高木東一	高木東一	農	高木東一	子	本所横川
武蔵	金沢→六浦	菊間		宇田節之助	学	宇田節之助	亥	牛込御門内
安房	長尾	雁間	石上藤十郎	増田貢	農	増田貢	子	神田バシ外
安房	花房	帝鑑間	清水源次郎	清水源次郎	農	清水源次郎	卯	木挽町三丁目
安房	勝山 →加知山	菊間		友松勘之丞	貨	友松課	丑	下谷広小路
安房	館山	菊間	松下直衛	松下直衛	農	松下直衛	巳	浜町
上総	鶴舞	雁間	多川善右衛門	津川奇雲	農	津川奇雲	巳	蛸壳町
上総	柴山	雁間	赤岸兵蔵	赤岸兵蔵	農	里見莊兵衛	亥	駒込
上総	久留里	雁間	田丸謙蔵	田丸謙蔵	農	田丸謙蔵	丑	下谷黒門丁
上総	大多喜	元雁間		糟谷権兵衛	農	糟谷権兵衛	丑	駿河台
上総	飯野	帝鑑間	仙石左右衛門	仙石左右衛門	度	仙石好真	酉	麻布
上総	佐真	雁間	岩堀舎人	岩堀舎人	貨	岩堀舎人	午	外桜田
上総	鶴牧	元雁間	青木久兵衛	青木久兵衛	農	青木久兵衛	子	呉服バシ内
上総	一ノ宮	菊間	小泉重兵衛	小泉重兵衛	農	小泉重兵衛	戌	飯田町
上総	桜井	菊間	近藤門造	近藤門造	農	近藤門造	亥	小石川菊坂
上総	小久保	元菊間	篠原真事	篠原真事	学	篠原真事	子	林町
上総	菊間	帝鑑間	五十川中	五十川中	学教	五十川中	子	大川端
下総	佐倉	帝鑑間	依田右衛門二郎	依田右衛門次郎	軍学	依田朝宗	酉	日ヶ久保
下総	古河	雁間	恩田啓吉	恩田啓吾	農	恩田啓吾	亥	大塚
下総	関宿	雁間		羽太庄兵衛		大久保冬蔵	巳	灵岸北新堀
下総	結城	帝鑑間		鈴木権作	駅	鈴木権作	申	南部坂
下総	多古	菊間	佐藤泰造	佐藤泰造	山	野村隼太	亥	伝通院ワキ
下総	高岡	菊間	富野兒助	富野兒助		富野実	亥	雉子橋通
下総	小見川	菊間	荒井欽吾	荒井欽吾	貨	荒井欽吾	酉	日ヶ窪
下総	生実	菊間	京僧彦助	京僧彦助	農	京僧茂	丑	小川町
常陸	水戸		武田金次郎	梶又左衛門	陸	梶又左衛門	亥	小石川
常陸	土浦	元雁間	小林儀左衛門	小林儀右衛門	教	西川謙	巳	小名水川
常陸	笠間	溜間次	村田源之丞	加藤勇雄	教	加藤勇雄	巳	大川端
常陸	府中→石岡	大広間	兼子庫之助	兼子庫之助	内	兼子庫之助	亥	小石川吹上
常陸	下館	雁間		富松何右衛門	陸	川又勇馬	午	外桜田
常陸	牛久	菊間	安島為之進	安嶋解三	農	広沢鉦一郎	申	溜池
常陸	宍戸		日置熊次郎	日置熊次郎	内	日置熊次郎	亥	飯田町
常陸	下妻	菊間	軽部鶴弥	軽部鶴弥	刑	軽部斐	卯	愛宕下
常陸	麻生	柳間	高木大之進	高木大之進	刑	高木大之進	巳	大橋
常陸	松岡		藤田諒蔵	藤田諒蔵	内	藤田諒蔵	亥	牛込白ガ子丁
常陸	志筑			横手五左衛門	山	横手近義	卯	愛宕下
近江	彦根	溜間		西村捨三	教軍	西村捨三	申	外桜田
近江	膳所	帝鑑間	榊原専蔵	榊原専蔵	外	榊原梶	子	呉服バシ内
近江	水口	帝鑑間	岡田勘右衛門	岡田勘右衛門	学	岡田正和	卯	愛宕下
近江	大溝	柳間	三宅次郎太夫	蔵田寛之助	学	蔵田寛之助	戌	芝口
近江	西大路		井上周蔵	井上周蔵	内	井上周蔵	子	柳原
近江	山上	菊間	森直記	田村佐仲	内	田村佐仲	辰	木挽町
近江	宮川	帝鑑間	平松要右衛門	平松要右衛門		新庄静衛	午	愛宕下
近江	三上	雁間	塚本九一郎	塚本九一郎	内	塚本九一郎	午	芝将監バシ
美濃	大垣	帝鑑間	井上庄次郎	小原兵部	教	小原迪	午	溜池

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
美濃	加納		片岡旗之助	片岡旗之助	営	片岡静	巳	矢ノ倉
美濃	高須	大広間	荒川官三	荒川官三	営	小山田禎三	戌	四ツ谷ゴモン外
美濃	郡上	雁間		綾部誠一郎	内	戸川濟	申	青山
美濃	岩村		丹羽瀨賢木	岩松伝藏	内	岩松伝藏	辰	大名小路
美濃	苗木	菊間	石原正三郎	石原正三郎	内	石原正三郎	卯	愛宕下
美濃	大垣新田	菊間	有竹衛門	有竹衛門	教	有竹裕	午	桜田外
美濃	高富	菊間		江良平太左衛門	駅	江良平太左衛門	酉	麻布
美濃	今尾	なし	奥田忠右衛門	佐藤小六	外	佐藤小六	申	
信濃	松代	帝鑑間	望月帰一郎	望月帰一郎	農	望月帰一郎	卯	外桜田新シバシ
信濃	松本	帝鑑間	野々山四郎左衛門	野々山四郎左衛門	営	神方信藏	巳	矢ノ倉
信濃	上田	帝鑑間	鈴木太郎	瀧沢省吾		瀧沢省吾	亥	本郷御弓丁
信濃	高遠	元雁間	岡野小平治	岡野小平治	農開	岡野小平治	丑	小川町
信濃	高島	帝鑑間	千野良之輔	千野良之輔	内	千野良之輔	□	蛸壳丁
信濃	飯山	元帝鑑間	本多数馬	本多数馬	海	本多数馬	丑	小川町
信濃	龍岡	菊間	鈴木角右衛門	鈴木角右衛門	営	鈴木角右衛門	□	芝新堀
信濃	小諸	雁間	笠間鋼三郎	笠間鋼三郎	農	加藤鍊之助	巳	矢ノ倉
信濃	岩村田	元雁間		田中勇三	度	田中勇三	丑	神田明神下
信濃	飯田	柳間	小林助右衛門	小林助右衛門	租	小林助右衛門	寅	向柳原
信濃	須坂	柳間	北村恒藏	北村経藏	学	北村経藏	子	柳島
上野	前橋	大広間	四王天兵亮	四王天兵亮	教	四王天清	亥	溜池
上野	高崎	雁間	長坂鉄之助	長坂鉄之助		長坂鉄之助	亥	小石川
上野	館林	元雁間		山本四郎		山本四郎	□	大川端
上野	沼田	帝鑑間	二階堂貢	二階堂貢	農	二階堂貢	申	江戸見坂
上野	安中	雁間	飯田逸之助	飯田逸之助	農	飯田逸之助	寅	佐久間丁
上野	小幡	帝鑑間	石原七郎	石原七郎	教	石原七郎	申	三川タイ
上野	伊勢崎	菊間	長尾慎次郎	長尾慥二郎	農	長尾慥二郎	卯	愛宕下
上野	吉井	大廊下	白田東	白田東	農	白田東	申	赤坂ヤゲン坂
上野	七日市	柳間	海野三雄	海野三雄	農	海野三雄	戌	半蔵外
下野	宇都宮	雁間	戸田保	戸田保	陸	戸田保	巳	大川端
下野	烏山	雁間	大久保金吾	大久保金吾	内	大久保金吾	寅	三味線ボリ
下野	壬生	帝鑑間		増田鏑太郎	農	増田鏑太郎	丑	下谷ヒロ小路
下野	黒羽	柳間	小山勘解由	三田称平	学	三田称平	丑	湯島天神下
下野	谷田部	柳間	熊谷貞藏	熊谷貞藏	学	熊谷貞藏	子	柳原
下野	佐野	帝鑑間	今井金平	今井金平	陸	今井金平	戌	三番町
下野	大田原	柳間	大谷長太郎	大田原高	農	大田原高	酉	麻布永阪
下野	足利	菊間	関口彦作	善野司	農	善野司	丑	小川町
下野	吹上	菊間	富岡佐金司	佐々木鉄右衛門	学	富岡佐金司	卯	山下ゴモン内
下野	喜連川			秋元与助	学	秋元与助	丑	池ノハタ
下野	高德			平坂信八郎	陸	平坂信八郎	巳	濱町トウカ堀
磐城	棚倉			比原源助		比原源助	酉	龍土
磐城	中村	帝鑑間	錦織四郎太夫	錦織四郎太夫	学	錦織績	辰	新シバシ内
磐城	三春	帝鑑間	奥村権之助	奥村権之助	農	奥村権之助	未	飯倉
磐城	磐城平	雁間				室直	亥	大塚*
磐城	守山	大広間	岡田又吉太郎	岡田又吉太郎		岡田真魯	亥	大塚
磐城	泉	帝鑑間	桑原政右衛門	桑原政右衛門		桑原政右衛門	子	神田シバシ通

公議人の変遷について  
三村 昌司

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
磐城	湯長谷	帝鑑間		茂原肇	陸	茂原肇	西	麻布サクラダ丁
岩代	若松							
岩代	二本松	大広間				脇屋舎	卯	
岩代	福島	雁間						
岩代	白石							
陸前	仙台	大広間				熊谷内蔵	辰	日比谷*
陸中	盛岡	大広間				山田正助	酉	アザブ一本松*
陸中	一ノ関	柳間		本間壯太郎		森八弥	未	愛宕下*
陸中	盛岡内分	柳間				谷川林平	卯	愛宕下*
陸奥	弘前	大広間	神東太郎	桜庭太次馬	学	桜庭太次馬	子	本所二ツ目
陸奥	八戸	大広間		中里行蔵	学	中里行蔵	酉	市兵衛町
陸奥	黒石	柳間	三浦太源	山崎伝	学	山崎伝	子	本所三ツ目
陸奥	松前福山	帝鑑間						
羽前	米沢	大広間				木下三平	酉	アサフ飯倉片丁*
羽前	庄内	溜間格				朝比奈一介	子	筋カヒ内*
羽前	新庄	帝鑑間	波多野治右衛門	波多野治右衛門	営	波多野治右衛門	未	飯倉*
羽前	山形					井上八郎	未	三田*
羽前	上ノ山	帝鑑間				小野素平	酉	浅草新ホリ*
羽前	天童	柳				今村芳雄	辰	大名小路*
羽前	長瀨	菊間	人見秀雄	人見秀雄	交	人見秀雄	卯	愛宕下
羽前	米沢新田							
羽後	久保田	大広間	初岡敬治	初岡敬次	学	小野岡篤雄	寅	下谷
羽後	松山一松嶺			小華和太郎人	学	小華和太郎人	寅	浅草ヒケシ丁
羽後	本庄	柳間		小高半三	学	皆川平格	寅	浅草
羽後	亀田	柳間		吉田権蔵	学	吉田権蔵	子	本所五ノハシ丁
羽後	秋田新田	柳間		水野立三郎	学	水野立三郎	寅	元鳥コヘ
羽後	矢島			高柳安右衛門	陸	高柳安右衛門	寅	下谷元ヤシキ*
若狭	小浜	元帝鑑間	成田作右衛門	成田作右衛門	貨山	相馬驥太郎	戌	牛込寺町
越前	福井	大廊下	毛受将監	毛受将監	外	毛受洪	巳	蛸壳丁
越前	丸岡	帝鑑間	黒木采男	有馬俊太郎	度	有馬俊太郎	亥	駒込→一橋御門外
越前	大野	雁間		戸塚左近右衛門	農	戸塚左近右衛門	子	スズカヒ御門外*
越前	鯖江	雁間	川口市之進	河口市之進	陸	河口孚	未	西ノ久保
越前	勝山	帝鑑間	林慎助	林慎助	貨	林慎助	巳	ハマ丁
越前	敦賀	雁間	平山小太郎	平山小太郎	租	平山小太郎	辰	木挽町四丁目
加賀	金沢	大廊下	岡田雄次郎	岡田雄次郎	外	岡田雄次郎	丑	池ノ端
加賀	大聖寺	大広間	分利廉平	分利廉平	貨	山崎泰	丑	池ノハタ
越中	富山	柳間	入江民部	入江民事(ママ)	貨	入江事	丑	池ノハタ
越後	高田	溜間格	仁木数馬	仁木数馬	貨	仁木数馬	丑	池ノハタ
越後	新発田	大広間	相馬作右衛門	佐藤八右衛門	外	佐藤八右衛門	卯	幸橋外
越後	村上	帝鑑間				和田敬之助	巳	ハマ丁カキカラ丁*
越後	村松	柳間	治外記	治外記		治外記	丑	下谷広小路
越後	長岡	帝鑑間				武部源右衛門	申	永田丁*
越後	与板	帝鑑間	八尾収蔵	八尾収三	教軍	八尾収三	寅	向柳原
越後	三根山	菊間		岡本直記	貨	岡本直記	酉	飯倉
越後	清崎	帝鑑間		毛受鉦三郎	海	毛受鉦三郎	申	溜池



国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
越後	黒川	帝鑑間	渡辺清右衛門	渡辺清右衛門	学	渡辺恬	午	外サクラダ
越後	三日市	帝鑑間	関小四郎	関小四郎	学	関小四郎	寅	三味線ボリ
越後	椎谷	元菊間	原株之輔	原株之助	外	原株之助	酉	龍土
丹波	篠山	雁間	赤見為左衛門	赤見為右衛門	貨	赤見為右衛門	申	青山
丹波	亀山	帝鑑間	青山七郎左衛門	青山七郎左衛門	駅	青山緑	子	南割下水
丹波	福知山	雁間	中野斎	中野重明	租	中野重明	辰	築地
丹波	園部	柳間	長瀬久左衛門	藤田克之助	学	藤田克之助	亥	雉子バシ外
丹波	柏原	柳間	田辺確	田辺確	陸	池田謙介	未	三田
丹波	綾部	柳間	志賀律三郎	志賀律三郎	刑	志賀律三郎	巳	八丁堀
丹波	山家	柳間	清水八右衛門	清水八右衛門	内	清水八右衛門	酉	龍土
丹後	宮津		田副闲左衛門	関清門	教	関清	未	虎ノ門内
丹後	田辺	元雁間	堀内謹右衛門	堀内謹右衛門	刑	堀内謹右衛門	巳	八丁ボリ
丹後	峰山	元菊間	佐藤栄	佐藤栄	内	佐藤栄	亥	九段坂下
但馬	出石	柳間	麻見達左衛門	麻見達左衛門	租	麻見義脩	未	西ノ久保
但馬	豊岡	柳間	岩崎豊太夫	岩崎豊太夫	交	岩崎豊	戌	平川天ジン前
但馬	村岡			池田勤一郎	外	池田勤	午	芝山内
因幡	鳥取	大廊下	山田宗平	沖探三	外	沖探三	辰	八代スガシ
因幡	鹿奴	柳間						
因幡	若桜	柳間						
出雲	松江	大広間	雨森謙三郎	雨森謙三郎	教	雨森謙三郎	申	赤坂ゴゼン内
出雲	広瀬	帝鑑間	岩田瀬左衛門	岩田瀬左衛門	租	岡部与一郎	戌	四ツ谷ゴモン外
出雲	母里	帝鑑間	今村喜内	今村喜内	駅	今村喜内	申	青山久保丁
石見	鶴田	大広間		生田小膳	農	生田精	未	麻布永坂
石見	津和野	大広間		小裁縝	教	小裁縝	辰	木挽丁
播磨	姫路	溜間	松崎彦右衛門	松崎彦右衛門	農	松崎彦右衛門	巳	元スキヤ丁 →北八丁ボリ
播磨	明石	大廊下	松本七兵衛	松本七兵衛	農	松本陳	戌	半蔵外
播磨	龍野	帝鑑間	加集寛介	加集寛助	貨	加集寛介	卯	芝口二丁目
播磨	赤穂	柳間	神吉重三	神吉重三	学	神吉重三	午	神明前
播磨	三日月	柳間	高橋和多留	高橋和多留	貨	高橋和多留	未	愛宕下
播磨	山崎	帝鑑間	立花次郎左衛門	立花次郎左衛門	租	立花次郎左衛門	未	虎ノ門外
播磨	福本			岩本範治	山	岩本範治	卯	アタゴ下久保丁
播磨	安志	帝鑑間	鶴居彦左衛門	鶴居彦左衛門	租	鶴居彦左衛門	亥	小石川トミ坂
播磨	三草	帝鑑間		那須金右衛門	刑	那須金右衛門	午	山下ゴモン内
播磨	林田	柳間	生田平格	生田平格	内	生田平格	丑	神田明神下
播磨	小野	柳間	黒石涯	黒石涯	貨	黒石涯	午	アタゴ下
美作	津山	大廊下	鞍懸寅二郎	関口泰造	度	中沢江	亥	姿見
美作	勝山→真島	雁間		加藤右門	陸	加藤右門	亥	谷中三サキ
備前	岡山	大広間	成田太郎兵衛			香川真一	辰	辰ノ口
備前	岡山新田	柳間		三宅鉦太郎	陸	三宅鉦太郎	辰	大名小路
備中	鴨方			矢吹卯之二	陸	矢吹卯之二	寅	鳥コヘ
備中	松山	元雁間						
備中	足守	柳間		松浦鶴治	山	松浦鶴治	酉	麻布ヒロフ
備中	庭瀬	菊間	三宅紘	森安七右衛門	度	森安七右衛門	丑	ユシマ天神下
備中	新見	柳間	蜂屋篤郎	蜂屋新	山	蜂屋新	卯	芝大門マエ
備中	岡田	柳間		加藤治平	開租	加藤治平	寅	鳥コヘ池田内

公議人の変遷について  
三村 昌司

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
備中	浅尾	菊間		堀和錦藏	内	堀和錦藏	亥	小日向バ、
備中	成羽		田辺九郎左衛門	田辺九郎左衛門	貨	田辺九郎左衛門	酉	麻布一本松
備後	福山		武田平之助	武田平之助	刑	武田平之助	亥	本郷丸山
安芸	広島	大広間	久保田秀雄	久保田秀雄	教	石井正敏	未	霞関
安芸	広島新田	柳間	峰岸多喜馬	峰岸正愿	教	峰岸正愿	未	霞関
周防	徳山		小川右馬雄					
周防	岩国		今田鍊左衛門	今田鍊左衛門		今田鍊左衛門	未	外サクラダ水ノ内
長門	萩		内藤左兵衛	中村誠一		境栄藏	辰	大手前
長門	府中→豊浦		時田少助	時田少助		時田少助	未	外サクラダ水ノ内
長門	清末		広井彝也					
紀伊	和歌山		伊達五郎	伊達五郎	教	伊達五郎	卯	芝浜松丁
紀伊	田辺			柏木兵衛	教	柏木常雄	亥	小石川水道丁
紀伊	新宮		川瀬権左衛門	矢田武右衛門	営	矢田丹藏	戌	浄ルリ坂
阿波	徳島	大廊下		山本弥野右衛門	外	山本弥野右衛門	子	神田バシ内
讃岐	高松	溜間	下津権内	下津権内	軍	下津権内	亥	小石川ゴモン内
讃岐	丸亀	柳間	加藤修造	加藤修造	営	加藤修造	午	外サクラダ新シバシ
讃岐	多度津	柳間	畑平学	岡田真治	農	岡田真治	酉	麻布永坂
伊予	松山	溜間	藤野立馬	中金称平	外軍	中金称平	未	三田
伊予	宇和島	大広間		三輪清助	海	成田積	酉	麻布龍土*
伊予	大洲	柳間		兒玉精	教	兒玉精	寅	下谷
伊予	今治	帝鑑間	久松修理	久松修理	軍	久松修理	亥	小川丁一橋通*
伊予	西条			新名宇右衛門	貨	新名宇右衛門	申	青山百人町
伊予	吉田	柳間		国府寺源兵衛	海	国府寺源兵衛	辰	八丁ボリ
伊予	新谷	柳間		三橋肇	陸	三橋肇	寅	浅草新ボリ
伊予	小松	柳間	喜多川鍊太郎	宮田深藏	外	宮田深藏	卯	愛宕下
土佐	高知	大広間	林亀吉	伴権太夫	外	伴権太夫	辰	カヂバシ内
土佐	高知新田	柳間						
筑前	福岡	大廊下	岡田稔	京極常樹	学	京極常樹	未	霞関
筑前	秋月	柳間		白石奎右衛門	農	白石眞俊	未	芝新堀
筑後	久留米	大広間	早川与一郎	早川与一郎	軍	早川与一郎	未	赤羽根
筑後	柳河	大広間	杉森六郎兵衛	杉森六郎兵衛	刑	杉森六郎兵衛	寅	下谷徒士町
筑後	三池	元柳間	森脩	森脩	交	森脩	巳	深川高バシ
豊前	小倉	帝鑑間	丹羽六兵衛	石井省一郎	外	栗原正人	丑	下谷
豊前	中津	帝鑑間		生田四郎兵衛	海	生田実	卯	汐留
豊前	小倉新田	帝鑑間	二木縫殿助	二木縫殿助	外	二木新	酉	
豊後	岡	柳間	中川潜叟	中川潜叟	駅	中川潜叟		芝口
豊後	白杵	柳間	若林勘兵衛	若林勘兵衛	営	橋朴	午	外桜田新バシ外
豊後	杵築	元帝鑑間		松崎龍右衛門	山	松崎清雄	午	サクラダ外
豊後	日出		帆足龍吉	帆足龍吉	学	帆足龍吉	午	愛宕下
豊後	府内	元帝鑑間	樋口十郎右衛門	樋口十郎右衛門	学	樋口十郎右衛門	子	筋違内
豊後	佐伯	柳間	竹中武之允	古川左近右衛門	営	古川韜	未	佐久間小路
豊後	森	柳間	園田保	園田保	学	園田保	午	芝田町
肥前	佐賀	大広間	羽室雷助	羽室雷助	山			
肥前	小城	柳間		持永治兵衛	海	園田筑五郎	辰	幸橋内
肥前	島原	帝鑑間	島田平右衛門	島田平右衛門	駅	能見権右衛門	辰	三田二丁目

国名	藩名	殿席	明治2年3月	明治2年5月	課	明治2年10月	部	藩邸所在地
肥前	平戸	柳間	小関与右衛門	小関与右衛門		小関亨	寅	鳥越
肥前	唐津	帝鑑間	中沢見作	中沢見作	外	中沢見作	午	外サクラ田
肥前	蓮池	柳間		成富新兵衛	外	永田雄助	酉	龍土
肥前	大村	柳間		長岡新次郎	学	浅田進五郎	申	永田町
肥前	鹿島	柳間		永野寿郎兵衛	農	永野恪一	酉	龍土
肥前	五島福江	柳間	近藤八十右衛門	沢渡双吉	外	沢渡双吉	酉	麻布六本キ
肥前	平戸新田	柳間	加藤小左衛門	加藤小左衛門	軍	加藤小左衛門	子	大川端
肥後	熊本	大広間	鎌田平十郎	鎌田平十郎	刑	鎌田平十郎	巳	龍ノロ→松嶋丁
肥後	熊本新田	柳間	笠間英之進	笠間英之進	学	笠間英之進	巳	深川六ヶケンホリ
肥後	宇土	柳間	岡音五郎	岡音五郎	学	岡音五郎	申	永田町
肥後	人吉	柳間	新宮左太夫	新宮左太夫	農	新宮竹間	申	赤坂町五丁目
日向	延岡	帝鑑間	鈴木才藏	鈴木才藏	農	鈴木才藏	□	虎ノ門
日向	飫肥	柳間	稲津濟	稲津濟	教	稲津濟	□	外サクラダ南ノ内
日向	佐土原	大広間		富田三藏	駅	曾小川実	辰	幸ハシ内
日向	高鍋	柳間	坂田莠	坂田莠		坂田莠	巳	矢ノ倉
薩摩	鹿兒島	大広間		内田仲之助		内田仲之助	子	カンダ橋御門内*
対馬	府中→萩原	大広間		西山亮三郎	海	森川玉城	寅	向柳ハラ*
	(一橋家)		鈴木義太郎	鈴木義太郎	教	田中哲輔	亥	小日向与力ハシ →本郷春木丁
	(田安家)		磯部寛五郎	磯部寛五郎	貨	磯部寛五郎	戌	牛込二十キ町

(注1) 藩名は原則的に明治2年3月段階で存在しているものを採用。ただしその時点で名称が不確定な場合、そののちについて藩名を記載している。またこの表に記載されている期間中に藩名が改まったと確認できるものは、ふたつの藩名を記載している。

(注2) 分課の略称は勸農＝農、租税＝租、駅通＝駅、貨幣＝貨、外国交際＝外、外交交易＝交、鉱山＝山、度量＝度、国内商業＝内、開墾＝開、学校出版＝学、刑法＝刑、軍律＝軍、海軍＝海、教法＝教、陸軍＝陸、營繕水利＝營、である。

(注3) □は判読不能。空欄は記載なし、項目なし、あるいは黒塗りを意味する。

(注4) 藩邸所在地は明治2年5月の史料に記載されているものを記したが、これが空欄でかつ明治2年10月の史料に所在地が記載されている場合、それに\*をつけた。5月と10月で違う場所が記載されている場合はふたつ記している。

(注5) 人名の明らかな誤記と思われるものは修正し、誤記が疑われるものは(ママ)を記した。